

優秀賞

テーマ3…多様性を認め合う社会をめざして
「見えない心の繋がり」

千葉県・筑波大学附属聴覚特別支援学校3年 舘野 泰治

「すみません、もう一度お願いします。」

「コンビ」の会計や周囲が騒がしい環境で、相手の話が聞き取れなかった時によく口に出す言葉だ。私は二歳のときに耳の聞こえが低下し、現在は補聴器と人工内耳を装着して生活している。補聴器や人工内耳を装着しても、全部が聞き取れるわけではない。日常生活の中で聞き取れないことを申し訳なく思いながら、聞き返すことがよくある。時には、聞き取れなかったのに作り笑いで流してしまい、分からないまま放置してしまつこともある。そんな自分が情けなくてたまらない。

子供の頃は健聴の友達から「耳につけているものは何」と聞かれても、恥じらうことなく説明することができていた。そして、その子たちと面白い切り遊んだり、話したりしたことは、楽しかったし、何よりも耳に障がいのある私を健常者と同じ人間だと自然に認めてくれていたようにとても嬉しかった。しかし、歳を重ねるにつれ、いつからか耳に障がいがあることを恥ずかしく思うようになった。日常生活の中で、相手の話を聞き取れなかったり、音声による周囲の情報が分からなかったりするなど、困ることが増えていったからだ。自分は耳が聞こえにくいから、とまるで障がい者が健常者の下にいるように感じてしまい、無意識にも私自身が自分から健常者に対して壁を作り、自信を無くしていた。

ある日、薬を貰いに薬局に入った私は、自分と同じ聴覚障がいのある薬剤師と出会った。その薬剤師は私の目をしっかりと見て、分かりやすく服薬指導をしてくれた。障がいの有無に関係なく、自分の仕事に誇りを持って輝く姿は、自分の聞こえにコンプレックスを感じていた私の胸に深く刺さった。自分がこんなに弱気ではないいけない、「情けない」の先に行かなくては、そう思わされた。

その反面、彼に尊敬の眼差しを向けていた私にどこか違和感を覚えた。それは、耳の聞こえない人がそつでない人と混じって働いていることが珍しい、と心のどこかで思っているからではないだろうかかと気付いた。確かに薬剤師という大変な仕事をこなしている姿はとてもかっこよく、勇気を与えてくれた。しかし、多様性を認め合う社会を目指すためには、健常者が障がい者への理解を深めるだけでなく、障がいのある当事者も、無意識のうちに自ら壁を作らないようにし、お互いに歩み寄ろうとすることが大切なのではないだろうか。

この社会には高齢者や、障がいがある人だけでなく、身体や心の病を抱えている人、災害などで心身に傷を負った人など、様々な理由で支援を必要としている人が多くいる。そのような多様化する社会で、支える人と支えられる人を分け隔てる、見えない壁があるように感じる。支える人から支えられる人への一方通行では、その壁は払拭されない。障がいなどがある人でも、自分ができることを生かして誰かを支えることはできるし、障がいがなくても、同じ困り事を抱えている人がいるかもしれない。大切なのは、困った時にお互いが少しずつ勇気を出して助け合うことだと思ふ。この小さな勇気と行動によって、思いやりで溢れた、人と人との見えない繋がりが少しずつ広がり、私たちが暮らしやすい社会に近づくのではないだろうか。

障がいや病気を抱えている人とそつでない人、支える人と支えられる人といった短絡的な分け方が「見えない壁」を作ってしまう。そつではなく、一人一人の歩み寄りによって生まれる「見えない心の繋がり」を大切にしてこそ、人々の個性が輝き、愛に満ちた社会が実現されるのだと信じている。

あの日、偶然出会った聞こえない薬剤師に私は今も憧れを抱いている。そして、たった数分あの時のやりとりが受験勉強の原動力になっている。私もいつか、不安を抱える目の前の人に医療を通して心に寄り添える、温かい薬剤師になりたい。